

日本特別ニーズ教育学会 2019 年度中間集会 開催報告

2019年6月2日(日)に、松本大学キャンパス(長野県松本市新村)にて、日本特別ニーズ教育学会 2019 年度中間集会を開催いたしました。本中間集会のテーマは「本人・当事者の声から特別ニーズ教育を考える」と設定しました。

午前中に理事会と「若手チャレンジ研究会」、午後には当代一の「当事者の通訳・語り部」である宮下智氏(社会福祉法人明星会理事長)による基調講演とパネルディスカッションを開催し、短い休憩時間で詰め込んだプログラムでしたが、70名をこえるご参加をいただき、盛会のもとに終了することができました。

本集会では非会員や長野県内・地域の教育や福祉現場に携わる方や、特別支援教育を学ぶ学部生が参加者全体の半数以上を占めており、所属問わず、その関心の高さが窺えました。

1. 若手チャレンジ研究会

前年度(2018年度)に理事会による企画として開始された若手チャレンジ研究会を本年中間集会でも引き続き実施いたしました。本研究会は、学部・大学院生、現職教師等による研究デザイン・実践研究発表(卒業論文・修士論文・博士論文等の研究デザイン発表、卒業論文・修士論文の発表、実践研究発表等)を行い、それぞれの研究を更に深めていく・進めていくために有効な議論の場の提供を目的に企画されたものです。

本集会では、コーディネーターを田中謙理事(日本大学)、コメンテーターを小野川文子理事(北海道教育大学)にお願いいたしました。発表は特別専攻科生・大学院生による5件の発表があり、発表者に対するフロアからも各研究の発展に向けた丁寧な質疑や議論が行われました。各発表のタイトルは学会ウェブサイトをご覧ください。



会場には、今後自身の研究発表も視野に入れている院生や学部生、現場教職員の方を含む約30名がご参加くださいました。発表者からは「大学院入学後、初めての経験でとても貴重なご意見をいただくことができた」「先生方のご意見等、とても勉強になりました」等の感想をいただき、また、中間集会アンケートからは「今後研究に臨みたいと考えている立場ですが、熱のある会で強い刺激となった」「様々な研究がきけておもしろかった」「真摯に学んでいる若い方たちを頼もしく思うと同時に、実際の教育現場に生きる内容や子どもの幸福につながる研究を願っている」「学校での実践にいかせる要素や支援の視点を含んだ研究も求めている」といったご感想・ご意見を頂戴しました。

若手チャレンジ研究会は、今年度長崎大学で行われる第25回研究大会でも継続していく予定です。教育現場やひいては子ども、本人・当事者にとって意味ある研究が広がり発展していけるよう、若手研究者への応援・若手チャレンジ研究会の在り方を今後も検討してまいります。



2. 基調講演・パネルディスカッション「本人・当事者の声から特別ニーズ教育を考える」

司 会 加瀬 進 氏（東京学芸大学）

基調講演 宮下 智 氏（社会福祉法人明星会）

パネリスト 鶴田恵市氏（長野県教育委員会事務局特別支援教育課）

A 氏（仮名）（知的障害者施設入所者）

高橋 智 氏（東京学芸大学）

現代の学校教育や地域生活支援では障害・診断の有無に係らず、多様な発達困難を有する当事者のニーズに応じた発達支援が求められています。午後の基調講演では、当代一の「当事者の通訳・語り部」である宮下智氏（社会福祉法人明星会理事長）をお招きし、続くパネルディスカッションでは本人・当事者、教育現場、研究のお立場からご登壇いただき、フロアの方との議論も通して、当事者の声や支援ニーズをもとにした生活支援・発達支援のあり方を検討しました。

【基調講演】

社会福祉法人明星会理事長であり、知的障害を有する入所者に長年寄り添い、彼らの「声」を聞き続けてきた宮下智氏（著書『本当の気持ちと出会うとき—見えにくいところところを紡ぐ意思決定支援43の物語—』エスコアール）より、「みんな幸せになりたい～あなたも私も～」を題目にご講演いただきました。



重度知的障害の方々も「幸せになれる主体」であり、社会においてみんながお互い少しずつ譲り合い幸せを紡いでいくことを前提に、明星学園での実践をもとにしたお話しでは入所者の声を数多く会場にお伝えいただきました。

利用者の「本当の気持ち」を大切にするための「お心主義」による支援は、絶え間ない行動観察と行動理解のための仮説・仮説検証を繰り返していく中で長い年月をかけながら「本当の気持ち」にたどり着いてきたこと、そこには入所者の行動の背景にある「伝えたい」「わかってほしい」「きっとわかってくれる」という願いを職員が信じて関わり続けてきた実践がありました。

宮下氏は、知的障害支援の専門性を「個々の障害特性を理解しながら、その方の主体的な生き方を保障するために、彼らの〈本当の気持ち〉を理解することのできる方法を獲得し、またそれを検証する実践ができることである」と伝えていただきました。そのためには、重い知的障害がある方々を仲間に入れて常識を作り直すこと、行動すべて（自傷、他害、パニック、下痢、てんかん発作、便秘、反復強迫行動、不眠、断続眠、自律神経症状等）が発信だと考える視点とその実践は、会場に大きなインパクトを与えてくださいました。

重度知的障害や行動障害を有する本人・当事者は「成長しない存在」では決してなく、問題行動とみえる行動の背景に多様な想いや発信があり、その発信をどのようにニーズとして捉えるかが語られました。

【パネルディスカッション】



基調講演に続くパネルディスカッションでは、加瀬進・副代表理事（東京学芸大学）の司会・進行のもと、基調講演をいただいた宮下智氏、本人・当事者、教育現場・行政、研究のお立場からお三方にご登壇いただきました。

本中間集会のテーマおよび本学会で大事にしている「本人・当事者の声」として、知的

障害者施設に入所する A 氏からは、パソコンで綴ったたくさんの想いを発表していただきました。

「自閉症、感覚障害で、苦しいのでしゃべれない、手紙で伝えたりしている。」

「(昔は) 自分のきもちが伝えられなくて飛び出したことがありました。」

「(小さい頃入所していた) 施設にいたとき、うそをついたり、寂しい思いがいっぱいあり

ました。そのときお母さんが怒られてしまって悲しいです。でもね乗り越えてきました。」

「おかあさんと最後のおわかれをするときに手紙を入れて涙でおわかれしました。」

「今の施設に入ってよかったことは、盆踊り、面会に行けること、美容院にいけることが良かったです。クラス旅行でごはんが美味しかったことが嬉しかった。」

「今はお金を貯めようと配達で頑張っています。」

「変えてほしいことは、人が嘘つくこと、服を引っ張ることを変えてほしいです。私は手紙が好きですが、勝手に人のことをいうのはやめてほしいです。悲しいことは退職したりお別れしたりするときに寂しいです。」

「私の夢のことを話します。料理とか作ってご主人に食べさせたい。結婚して奥さんになりたいです。」
(A 氏の発表内容一部)

ご自身のこと、かつての辛かった時期、家族との別れや家族への想い、施設での他者（入所者・スタッフ）との関わり、現在頑張っていること、周りに対する思いと願い、将来の夢について語ってくれた言葉は、会場の参加者にとって印象深いものとなりました。

参加者からは特に A 氏の発表に対して「体験を本人から聞くことができ良い機会になった」「当事者の声を聴いて、親としてまだまだ息子の気持ちに寄り添えていないことに気付かされた。A さんの生の声が聴けて、息子の代弁のように感じた」「当事者の声を聴くことができ、本当の意思決定とは何かということ強く考えさせられた」等の感想をいただきました。

教育現場・行政のお立場からは、鶴田恵市氏（長野県教育委員会事務局特別支援教育課）



にご登壇いただきました。鶴田氏がこれまで「児童生徒の主体性・本人の気持ち」を大事に行ってきた実践をもとに、学校教育において子ども・本人のニーズに寄り添い、本人と共に確認しながら活動を進めていくことの必要性や、一方で現実には学校現場の枠組み（日課、教職員体制）のなかで感じる教師のプレッシャーや体制の課題が述べられました。フロア

からの質問に関連して、通常学級においても特別支援教育の専門性・指導力をあげていくために、教育委員会では「信州型ユニバーサルデザイン」を検討し取り組んでいることが報告されました。

続く、研究の立場として、高橋智氏（東京学芸大学・本学会代表理事）からは、近年の当事者研究の到達点や本人・当事者の本当の気持ちに出会うための取り組みが各地で取り組まれてきた動向について紹介された。また、今後の特別支援教育・特別ニーズ教育においては、近年減少傾向がみられる知的障害・重度障害に関する研究に再度チャレンジし、彼らの豊かな精神世界への到達方法について、子ども・若者を含め広範な当事者の参加を得て、当事者研究をより一層発展させていくことが本学会が当面する重要課題であると指摘されました。



後半ではフロアからも参加していただき、会場全体で「本人・当事者の声やニーズ」を学校教育・地域生活にどのように繋げていくかを検討しました。A氏からは、学校時代やこれまでを振り返りながら「悪いことをしていないのに言われてつらい。伝えいこといっぱいあったけど（現在の）学園で生活をして頑張っていることを伝えたい」とのメッセージが述べられ、パネリストからは重度障害を有する本人の声を聴き取る際、日頃からの行動観察や何度も仮説検証を繰り返しながら本人の本当の気持ちに迫っていくことが挙げられました。

「知的障害は変わらない人」というイメージが世間一般には少なくないなかで、パネリストが日々の実践を通して本人・当事者の「声」を通訳・代弁し、家族や社会に発信していくことが重要であり、そのためには本人・当事者が想いを伝えられる環境や意思が伝えられる関係性を築き、本人・当事者の人生まるごと支援していくこと、人生で考える選択肢の幅を広げていくことが共有されました。

午後の基調講演・パネルディスカッションはとても濃厚な時間であり、参加者からは多くのご感想を頂きました。

特に特別支援教育・特別ニーズ教育を学び始めた学部生にとっては「様々な場所でのニーズを必要としている方の実体や支援の実際について知ることが出来てよかった」「長く関わっているからこそそのお話を多く聞くことが出来、とても勉強になりました」「本当の気持ちと



いう事を大切にスタンスを学ばせていただきました」「前までは障害と聞くと、難しくて大変なイメージがあったけど、分かってあげられたら逆に楽しくて、何で、こんな行動をとるのかとかを考えるのって大変じゃないと思った。大変と思わないで、一緒に考えて成長

していきたいと思った」「まだ学びはじめたばかりで難しい内容ではあったが、いろいろな人の研究発表や講演等を聞いて、さらによくしていかなければならないと感じた。そして、自分自身も学びに自らいかないと成長できないんだと感ずることができた」「障害を持っているとかいないとか関係なく、その人の事を第一に考えて支援することが大事ということが改めて分かった」等、ご登壇いただいた方の話がこれからの学びへの意欲が高まった様子がうかがえました。

また、教育や福祉の現場でご尽力されている方にとっては「宮下先生の講演は施設利用者のお気持ちを理解することの大切さと、そのための手法が築かれつつあることを学びました」「『関係性』ということの重要性を改めてご指摘いただきましたが、このことがより多くの関係者に共有されてほしいと願いました」「気持ちをくみとり支援にあたることで利用者様の姿がすごく変わるんだと勉強になりました」「特別支援の方も少し工夫してやればいっしょに学べる子供たちもいるという所がとても心に残りました。やはり、毎日の創意工夫が大切であると思いました」「一人一人『その人語辞典』があるからこそ、私たちは特別支援教育に魅せられているんだと思ひハッとしました」「鶴田先生のお話のように、学校全体、それ以上の規模で本人の意思を大切にしていかなければいけないと思ひます。また、学校では、そもそも意思を決定できているかということについて、考えていけたらと思ひます」「本人の気持ちを大切にした、そして気持ちに出会いたいということの大切さを心にとめて、また明日から一緒に生活していきたいと強く思ひました」等、今回の集会での議論をそれぞれに引き取っていただき、明日からの職場・実践に繋げていただく機会となりました。



本中間集会在今後の「本人・当事者のニーズに寄り添った教育・支援」に向けて内容の濃い議論が出来ましたこと、ご登壇者にご参加いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

第25回研究大会は、2019年10月18日～20日に長崎大学で開催いたします。特別ニーズ教育学の理念やあり方について、研究・実践など多様な立場と視点から議論するための企画を準備しております。皆様のご参加をお待ちしております。研究大会の詳細につきましては、学会ウェブサイトをご確認ください。

2019年6月27日

日本特別ニーズ教育学会 2019年度中間集會準備委員会

文責：内藤千尋（松本大学教育学部）